

さくらそう通信



長野県軽井沢町のサクラソウ

さいたま市をはじめとして、全国にはサクラソウをシンボルとする市町村がいくつかあります。前号の千葉県四街道市に続き、今回は長野県軽井沢町をご案内します。

避暑地、観光地として知られる軽井沢町は、平成5年に町制施行70周年を記念してサクラソウを町花と決めました。

町ではサクラソウの植栽や町民を対象とした講座を開催するなどの活動を行っています。

町内におけるサクラソウの変遷などについて、軽井沢町植物園の新井主査にご紹介いただきます。



軽井沢町植物園提供



サクラソウ ～軽井沢の今昔～

その花の色、形から日本を代表するサクラにちなんだ名前をもつサクラソウ。その生育地について、鳥居（1985）は、著書の中で、「自生地は粗林や草間の湿生地にあり、…」と、述べています。

湧水や湿地があり、また幾つかの水系がある軽井沢には

かつて、このような環境が普通にあり、サクラソウも容易に見つけることが出来たようです。

原、佐藤、黒沢（1974）の「軽井沢の植物」には、軽井沢駅近くの原野を紅紫に染めるサクラソウの大群落についての記述があります。著者の一人で、多年にわたり軽井沢

の植物をとくに研究されてきている現在軽井沢町植物園名誉園長の佐藤によると、昭和35年頃まで、およそ3ヘクタールに及ぶこの大群落は確かにあり、サクラソウの他にもアキカラマツ、ススキ、タチフウコ、ヨシ、レンリソウなどがよく見られたそうです。そして、この群落の中に、白花の個体があり、これに基づいてシロバナサクラソウが報告されています(H. Hara, 1934)。

～軽井沢の昔～

サクラソウの大群落が見られた昭和35年当時、またそれ以前の軽井沢は、どのような景観だったのでしょうか。

当園名誉園長の佐藤によると、大正末期か昭和初期まで、町の南側(杉瓜、発地、南軽井沢)は、農耕馬の餌としての採草場が広がり、3月頃には、野火付けをおこなっていたそうです。これにより、良質な草が採れる一方で、樹木の進入を防いでいました。このためか、昭和35年頃まで、杉瓜、発地、南軽井沢には、現在見られるような樹木は一切なかったそうです。また、野火付けでは、地上3～4cm上は燃えますが、それより下の地面に近いところは、燃えずに残りました。このような当時の人々の生活の影響をうけ、サクラソウは町内各所で、普通に見られ、わざわざ自宅に持ち帰り、庭に植栽し鑑賞するという人はほとんどいなかったそうです。

～軽井沢の今 植物園の取組み～

サクラソウにとって、樹木の茂らない、日当たりのよい適度な湿り気のある草地が広がっていた軽井沢は、過ごし易い環境であったのかもしれませんが、しかし、全国的な傾向でしょうか。近年、軽井沢でも、サクラソウをはじめとした草原を彩る植物、アツモリソウ、エンピセンノウ、ムシヤリンドウなど実に多くの植物について一株でさえ見つけ出すことが難しくなっています。こうした状況を踏まえ、軽井沢町植物園では、軽井沢に見られるサクラソウをはじめとした様々な植物を保存し、将来にわたって育成していくための活動をおこなっています。

サクラソウでは、昭和50年の開園当時、園内に自生していた群落が今も保存されています。部分的ではありますが、実生と思われる個体が隣接地に別の群落をつくるようになってきています。以下、園内のサクラソウの大まかな動きを記します。4月中旬、アズマイチゲの白色の花やカタクリの濃紅紫色の花が園内を彩る頃、黄緑色のサクラソウの葉を見つけることが出来ます。やがて、カラマツの新緑が軽井沢のあちらこちらで見られる5月上～中旬、サクラソウの紅紫色の花や、その品種シロバナサクラソウの白色の花が、園内各所で見られるようになります。やがてレンゲツツジやニッコウキスゲが見頃を迎える6月頃、その花は終わりを迎えます。

文献：鳥居（1985）—サクラソウ（日本テレビ）
原、佐藤、黒沢（1974）—軽井沢の植物（井上書店）
H. Hara (1934)—Flora of Karuizawa (XIV) J. Jpn. Bot. 10: 771

軽井沢町植物園主査 新井勝利

[軽井沢町植物園]



ご案内

軽井沢町植物園は塩沢湖の南に位置し、アウトレットショップなどで賑わう軽井沢駅南口から車で約15分の場所にあります。植物園は風越公園かぜこしに含まれ、同公園内にはテニスコートやカーリング会場として有名なスカップ軽井沢、オリンピック記念館などがあります。

植物園内はサクラソウ以外にも多種多様の植物が植えられ、折々の花を楽しめますので、皆様もぜひ訪れてみてください。

- ・所在地 軽井沢町大字発地1166
- ・休園期間 12月26日から翌3月31日まで

